
電腦遊戲

ユユキ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳遊戯

【Nコード】

N8838Z

【作者名】

ユユキ

【あらすじ】

ツイッター、ブログには疎いので、代わりに宣伝してくれると幸いです。

かなりの長編になる予定。長い目で見てください。

プロローグ（上）

設定は近未来。この世界は魔法少女に支配されている。と、言ったらラブコメを彷彿とさせるが、むしろ逆だ。

ラブもコメディもない。陰か陽で言えば、陰。シリアスな世界だ。少なくとも人が死ねるくらいには。

霞「探偵さーん」

年甲斐もなくかわいらしい、聞き慣れた声が扉越しに響く。ここは俺（優）の探偵事務所（木造）だ。

と、言っても事件などを取り扱ったことはない。どちらかというと何でも屋だ。

霞「優ちゃん」

霞、三十代の女性。ちなみに俺は二十歳。

どっちにとっても痛いので、嫌々ドアを開けることにした。ちなみに俺はツンデレではない。

優「頑張り過ぎだろ、おばあちゃん」

霞「熟女萌えっていいよね」

優「少なくとも、俺は遠慮する」

とりあえず、いつもの定位置に座る。ちなみに霞とは何の過去もない。

出会って随分経つが会話しかしていない。一応、依頼主のはずなんだが。

霞「今日は初依頼よ」

優「さっそく、地の文に反したな」

霞「私はそういう女よ」

ここは軽く流すことにする。

優「よし、本題入るか」

霞「釣れないのね。まあ、いいわ。桜」

扉が再び開き、俺と同年くらいの女性が入ってきた。

優「いたなら一緒に入ればよかったんじゃないか？」

桜「なんか恥ずかしいだろ」

霞「人見知りなのよ」

優「初対面だけど、絶対違うと思う」

桜はそのまま霞の隣の席に着く。

桜「人見知り萌え失敗だな」

霞「さすがに無理があつたわね、キャラ的に」

優「マジ、本題入ろう」

桜「弁天倒すぞ、弁天」

弁天、初代魔法少女。もちろん女性。ちなみにそういうイレギュラーは今のところない。魔法少女はみんな女性だ。電腦技術、魔法の開発者とも言われている。この情報は探偵として微妙と判断するが、優「そこでなぜ俺なんだ？」

霞「あら、鈍いわね。魔法は言葉の力。読解力。探偵にぴったんじゃない」

優「人殺しはぴったりじゃないけどな」

霞「優しいのね」

桜「優だけにだな」

ここは流すことにしよう。

優「ちなみに目的は？」

桜「このままだとプー太郎ということに気付いてな」

霞「それはいいことね。よくやったわ」

優「いや、知らねえよ」

霞「あら、他人事じゃないでしょ。この辺りではお人好しで好かれてるみたいだけど」

優「まあ、正直痛いところだな」

桜「で、プー仲間を誘いに来たわけだ。世界に干渉出来ないのは寂しいだろ？」

優「確かに暇だな」

霞「もう行くしかないっしょ」

優「人殺しにか？」

桜「楽しいぞ、世界に触れるのは。そうっだな、おまえが付いて来れば、止められるかもしれないだろ？」

霞「それを言われたら行くしかないよね」

優「そうだな」

霞「さすがお人好し」

優「褒め言葉にしておくよ」

霞「あら、褒めてるのよ」

優「それはどうも」

桜「じゃ、行くか」

その時、天井の扉が開き梯子が下りてきた。いわゆる天井裏というやつだ。

エンデ「やつたるばい」

天井裏に潜んでいたのは見た目十二歳程の少女。そう潜んでいた。住まわした覚えはない。

ちなみに付き合いは霞より少し長い。

霞「出たわね妹」

桜「そう言えば似ているな」

優「分な。そういうことでおまえの目はおそらく腐っている」

桜「マジで、眼科行くか」

エンデ「男のツンデレは見苦しいで、兄ちゃん」

優「おい、ダンどこだ」

天井裏からさらに見た目三十代くらいの男性が降りてくる。見た目は若いが実年齢はそれ以上だろう。

なんたつて、エンデのおじいちゃんだからな。その年上を呼び捨てにするのは、友達ということだ。

親しき仲に礼儀はいらない。と、少なくとも俺は思う。それじゃ寂しいからな。

ダン「おう、ここだ」

優「おまえもそこかよ。画的にシニールだな」

ダン「正直、泣きそうだよ」

エンデ「冗談きついわ、じいちゃん」

ダン「冗談だとよかったんだがな」

エンデ「なんでやねん」

ダン「そうらしい。もう妹にしてくれると俺もありがたいよ」

霞「その心配はもうないわ。このメンバーで住むことになるから」

優「それこそ、なんでやねん、だな」

ちなみに住宅区画はなくワンフロアだ。広さはまあ、十分だが。

霞「いいでしょ？」

優「まあ、いいけど」

ダン「相変わらず、霞には弱いみたいだな」

優「嫌な、おばあちゃんだよ」

ダン「腐れ縁だな」

優「おまえらもな」

エンデ「これで正式に妹やな、兄ちゃん」

優「もうそれでいいよ」

桜「妹萌えか。王道だな」

優「もうそれでいいよ」

エンデ「よし、話戻して、やったるばい」

優「おまえとダンは留守番な」

エンデ「妹に待っててほしいってやつやな」

優「もうそれでいいよ」

と、いうことで俺と霞、桜は弁天の元に行くことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838z/>

電腦遊戲

2011年12月27日21時55分発行